

本日は第70回看護未来塾世話人会の日、メディアからはゼレンスキー大統領がG7広島サミットに訪れたというニュースが流れています。前回の看護未来塾勉強会「戦争と看護」に参加してから、広島のニュースを目にするたびに、子どものころ広島で受けてきた平和教育のことや、戦争や原子爆弾に対する思いの記憶が浮かんでくるようになりました。

筆者が通った小学校、中学校は平和公園のある島にあります。広島はデルタ地帯ですので何本もの川と島でできています。平和公園は小学校の遠足の定番であり、お花見や遊び場として生活に根付いた場所でした。

小中学校のころ受けた平和教育はよく覚えています。授業やグループ活動で、平和記念資料館に何度も訪れ原子爆弾がもたらしたものについて学び、被爆者の体験談を聞きました。一方で、日本軍がアジア太平洋各地を占領した歴史も同時に学びました。戦争がもたらす加害と被害の両面を知ること、ノーマン・ヒロシマのメッセージを受け取り、戦争は二度と起こしてはならないと学びました。

しかし怒りの感情は残りました。広島市のホームページ¹⁾によると、1945年12月末までに原子爆弾によって約14万人が亡くなられたと推計されています。陸軍船舶司令部や呉軍港など当時の広島は軍事都市でしたが、原子爆弾は市街中心部に落とされましたので、非戦闘員である多くの市民が命を落とし、市民生活は奪い去られてしまいました。

この怒りは意識するにせよ、無意識にせよずっともち続けていたように思います。そんななか大学教員をしていたころに、上野千鶴子さんの「フェミニズムから見たヒロシマ 戦争犯罪と戦争という犯罪のあいだ」²⁾という本に出会いました。上野さんがおっしゃるには、軍事力の根拠は「国家暴力の非犯罪化」であり、市民社会において殺人と暴力は犯罪になりますが、国家の名において行われた殺人と暴力は犯罪とはなりません。また戦争の戦勝国にとっては正義の戦争となりますが、敗戦国にとっては不正義の戦争となり、制裁の対象となってしまいます。上野さんはフェミニズムの立場から「正義の暴力はない」「あらゆる暴力の犯罪化」を結論としています。

これを読んで戦争や原子爆弾に対する思い、怒りの感情は整理されたように感じました。やっぱり正しい暴力なんてものはない。シンプルにそう考えられるようになりました。

平和記念資料館には、被爆者お一人お一人を遺品ともに丁寧に紹介しているコーナーがあります。お一人お一人に生活があり、人生があったことが伝わってきます。今回のG7広島サミットが、たとえそれぞれの政治家の政治的パフォーマンスの部分が大きかったとしても、そのコーナーに目を留める機会になっただけだと思います。

1) 広島市。死亡者数について。2019年10月21日。

<https://www.city.hiroshima.lg.jp/soshiki/48/9400.html>

2) 上野千鶴子(著)。フェミニズムから見たヒロシマ 戦争犯罪と戦争という犯罪のあいだ。広島：家族社、2002、p.1-40。